

中国の名詩鑑賞 9

内田泉之助監修 福本雅一編



中国の名詩鑑賞

9

内田泉之助 監修
福本雅一 編



明治書院

著者紹介

ふくもと・まさかず

昭和6年大阪生まれ。

京都大学文学部博士課程修了。

詩人。

著書に「近世詩集」(共著)などがある。



中国の名詩鑑賞 9 〈元・明〉

¥ 1500

昭和51年2月5日印刷

昭和51年2月10日発行

©1976 M. Fukumoto

著者 福本 雅一

発行者 株式会社 明治書院

代表 三樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1-16 〈101〉

電話 294-5336(代) 振替口座 東京 3-4991

0398-25109 8305 製本 高陽堂

序 言

唐詩が中国文学の珠玉であるとは言いが古された言葉であるが、わたくしは之を更に漢詩全般に拡めて見ても、あながち不当ではないと信ずる。

思うに漢詩は極めて多彩な作家の詩想を、その表現上の句法・押韻・平仄等複雑な形式的規制のもとに、比較的簡潔で纏った表現を行うことが、その共通的特質となっている。而してその特質が夙に我邦に伝来して、遠く詩経の時代から、漢・魏・六朝・唐・宋・元・明・清等の各時代に応じて發展の変遷を経過したもので、時に詩経・樂府・古詩・律詩・絶句等の変化はあっても、その基本形は常に維持保存されて今日に及んでいる。

なお特筆したいのは漢詩という中国の文学的形式が我邦に伝来するや、訓読という国語の読み方に定着し、我が固有の思想文化に浸潤流传するに及んで、わが詩的文学の成長を促し、今日に及んでは彼我の区別すら并じ難いまでに發展を遂げた。乃ち漢詩の読解鑑賞は、わが国文化の理解發展に欠くことのできぬことは贅言を要しない。

ここに、明治書院が『中国の名詩鑑賞』を開設刊行する所以は、如上の意味から漢詩を通して、広く中国並びにわが国文化の闡明に寄与せんとするものである。

執筆を担当される各氏はいずれも次代を担うべき新進の学者で、担当の範囲も、詩経・古楽府・古詩・唐詩（初唐・盛唐・中唐・晚唐）・宋詩・元明詩・清詩の十巻に分かつて、漢詩の全分野を網羅した。幸に執筆各位が、作品の推移、評釈鑑賞等に縦横の健筆を奮って、読者各位の期待に応えられることを要望する。監修者として敢て一言を序した次第である。

昭和五十年八月八日

内田泉之助

目次

序言	内田泉之助	一
概説		一
西域河中十詠	其六	七
過梅嶺岡留題	耶律楚材	七
白雁行	伯顏	八
村居雜詩五首	劉因	九
其一 其二 其三		一〇
馮瀛王吟詩臺		一三
岳鄂王墓	趙孟頫	一五
罪出		一七
老態		一九
有所思		二〇
寄三子昂君墨竹	管道昇	二三
擬文丞相	虞集	二三
都城雜詠	宋褰	二四

燕姬曲	薩都刺	壹
過三高郵射陽湖雜詠九首	〃	貳
其一 其六 其八		
過三廣陵驛一	〃	元
採蓮曲六首	丁鶴年	叁
其三 其五		
述懷	倪瓚	三
宮詞	王蒙	壹
客中感懷	〃	美
幕宿田家作	〃	毫
吳子夜四時歌	楊維禎	完
西湖竹枝歌	〃	巳
又漫興 又春俠雜詞 又燕子辭 又		
毛女	〃	興
金盤美人	〃	兗
感時述事十首 其五	劉基	兗
旅興五十首 其四十四	〃	叁
懷懷歌	〃	叁

秋夜月 袁 凱 五

春 思 袁 凱 五

薤露歌 袁 凱 五

古意二十首 袁 凱 六

其十三 其二十

江上二首 其二 袁 凱 六

寄家書 袁 凱 六

移 居 袁 凱 六

老夫五首 其二 袁 凱 六

醉歌贈宋仲溫 高 啓 六

秋 柳 高 啓 六

逢吳秀才復送歸江上 高 啓 六

猛虎行 高 啓 六

里巫行 高 啓 六

張中丞廟 高 啓 六

憶昨行寄吳中故人 高 啓 六

感懷十四首 楊 基 六

其六 其十二

偶題		〃	八三
喜客來		〃	八三
劉伶臺		徐 賁	八五
柳短短送陳舜道		〃	八七
白蘋花送王汝器		〃	八八
贈彈箏人		張 羽	九〇
踏水車謠		〃	九〇
穆陵行		貝 瓊	九三
量田謠		吳 斌	九六
次王仲縉感懷韻十首兼呈張廷璧	 其八	方孝孺	九八
絕命詞		方孝友	九八
遜國怨		尤 侗	一〇一
下西洋		萬斯同	一〇四
前蹉跌		張 晉	一〇八
捕蝗詩示尙書郭敦		宣宗皇帝	一一〇
高 郵		楊士 奇	一二三
入 塞		于 謙	一二三
經進鹽圖八首 淋鹵圖		彭 韶	一二五

捕魚圖歌	李東陽	二六
風雨歎	〃	二九
趙承旨	〃	二三
寄沈石田求畫	黃雲	二五
泛海	王守仁	二六
書草萍驛	〃	二九
題灌山小隱二絕 其二	〃	二三
啾啾吟	〃	二三
西園	〃	二四
海寇	顧應祥	二五
秋望	李夢陽	二七
招隱山辭三章	〃	二六
其一 其二		
去婦詞	〃	二四
易水行	何景明	二四
歲晏行	〃	二九
平埧城南村三首	〃	二五
其一 其二 其三		

玄明宮行	……	〃	……	五
寄華玉	……	徐禎卿	……	六
錦津中對酒別劉善克	……	楊慎	……	六
寄遠曲	……	〃	……	六
寄夫	……	黃安人	……	六
安鄉道中觀婦人插田	……	夏言	……	六
老年謠	……	顧彥天	……	七
蒲生野塘中	……	張居生	……	七
適志吟	……	〃	……	七
錄別又十一首	其四	李攀龍	……	七
明妃曲四首	其三	〃	……	七
戰城南	……	王世貞	……	七
戚將軍贈寶劍歌十首	其五	〃	……	七
秋日懷弟	……	謝榛	……	七
夜話李弼長書屋因懷其尊君左納言	……	〃	……	七
陰風吹火篇呈錢刑部君一	……	徐渭	……	八
宛轉詞	……	〃	……	八
凱歌	……	沈明臣	……	八

春怨……………謝肇澗……………一六五

秋怨……………"……………一六五

妾薄命……………袁宏道……………一六六

橫塘渡……………"……………一六七

子夜歌二首……………王屋……………一六八

其一 其二

夜步……………高攀龍……………一六九

靜坐吟四首 其一……………"……………一七〇

檻車……………繆昌期……………一七一

沈雨若自_三常熟_二過訪……………鍾惺……………一七三

遊_三九峯山_二二首 其一……………譚元春……………一七三

霸圖……………夏完淳……………一七五

遇_レ盜自解……………"……………一七五

荅_三大明皇帝問_二日本風俗……………啗哩嘛哈……………一七六

付錄

作者解題……………一七九

概 説

元明の詩は、魅力に乏しいといわれる。元はモンゴルの漢人抑圧政策の下に、萎靡して振わず、明は前後七子による、論詩の喧騒のみが目立って、内容は空疎であると批難されてきた。いま、どの文学史を繙いてみても、元は曲、明は小説を、その時代の代表的な文学として掲げる。しかし、民国に到るまでは、あらゆる時代の文学の正統は、詩文——特に詩である、という意識を、すべての読書人は自明のこととして容認してきたのである。それ故、今日の文学史の評価は、今日から見た文学的成果の判断であるにとどまるのであり、各時代の読書人の文学認識とは、当然無関係である。

それでは、あらゆる時代を通じて、文学的營為の最高の榮譽を、常に担ってきた詩に対して、元明は、その不毛を侮蔑され、その成果を嘲笑され続けなければならないのであろうか。

なるほど、唐詩は、人間と世界が感情的に係わりあうあらゆる状況を、最も豊美に表現した。なるほど、宋詩は、人間と世界が理性的に係りあうあらゆる状況を、最も精緻に追求した。この点に限定すれば、後の時代がその成果を凌駕することは、恐らく困難であろう。しかし、詩という表現形式が存続する以上、そしてそれが、各時代の最も秀れた精神によって尊敬され、試みられてきた以上、そしてそれが、人間の心の最も美しい声であり、言葉の最も美しい結晶である、認められてきた事実を想起すれば、ある時代の詩が、無価値であるということは、およそあり得ないのではなかろうか。

唐詩は多く、ある普遍的な情況、例えば、白頭を悲しむ老翁、秋扇を怨む美女、あるいは日暮郷関を望む遊人、江湖に落魄する才子の心情を歌う絶唱であった。これらの詩はもちろん、ある特定の状況に於いて作られたものである。しかし多くの場合、その状況は背景に退き、どのような人間でも、もしその状況にあるとするならば、このように感じるに違いない、といった、いわば人間の共感に訴えることに重点が置かれ、その表現に工夫がこらされた、と言い得よう。

これに反し、宋以後の詩は、ある状況から生まれる人間心理の変化や、変相の面白さ、あるいは、ある状況そのもののへ興味や好奇心、換言すれば、切り取られた特定の時間と空間の表現へと、作詩の努力が、——それは唐詩の完璧に対する絶望からでもあろうが、——傾斜していった、とは言えないであらうか。

元明の詩は、作詩の背景を無視すれば、我われに訴える力は弱い。浮雲落日を歌う唐詩の絶妙には、遙かに及ばぬ。しかし、ある漂泊、ある没落を歌うことに於いては、はるかに現実に着し、より多く詩人の心を忠実に伝えているのである。試みに従来の『名詩選』の類を一瞥しよう。宋以後の、殊に元明の詩の、いかに寥々とわびしいことか。唐詩の風趣を規準とすれば、当然このような結果とならう。しかし、この規準は、今や破棄するべきであらう。そして、各時代に於いて大きな存在理由をもった詩を掘り起こし、その存在理由を明確にし、それを基礎として新しいアンソロジーを作らねばならぬ。このシリーズの目的も、一つはその点にこそあると考える。このように考えれば、今に残された元明清の膨大な量の詩集は、発掘と整理と評価と位置づけとを待ち望んでいる、文明の無尽の宝庫とさえ言えるではないか。

中国に侵入する前に、すでに西方の文明と接触していたモンゴルは、必ずしも中国文明を尊重せず、知識人の特権も認めないばかりか、長い伝統である科挙をも停止してしまつた。旧南宋人は蛮子と呼ばれて冷遇され、儒者などは、九儒十丐、つまり最下等の乞食の上に位置していたのである。

時代の文化の指導者であつた者たちの、政界での地位の低さは驚くべきものであり、趙孟頫や虞集でさえも例外ではない。それ故、官界から遮断された多くの読書人は、その知識を立身の手段として利用できず、空しく作劇に、あるいは閉ざされた抒情の世界へ、没入する他はなかった。元詩が一般に繊細で、気迫に乏しいのは、恐らくこのような事実の結果であらう。

しかし、次の明代に於いても、読書人の運命は決して好転しなかった。元の武断を継承する太祖朱元璋は、強力な漢

人帝国を再建するために、鉄と血の政策を断行し、知識人の批判を庄殺したのみならず、艱苦を共にした功臣たちのほとんどを、数度の大規模な疑獄で、完全に粛清した。太祖による、一代の詩人高啓の腰斬、成祖による、稀世の才子解縉の雪中埋殺は、このような酷烈の象徴的事件である。更に廷杖による朝臣の凌辱は、大臣を辱しむるは国を辱しむる也、と考えられていた前代からは、およそ想像もできぬ残刑であった。

しかも、暗愚で享樂好きな天子の輩出。加うるに、例えば嘉靖の四五年、万曆の四七年の、長い退屈な君臨、その下での深刻な党争。宦官による東林の虐殺とその報復。また崇禎五十宰相と呼ばれる、宰相への不信。一七七年間に五十人の宰相である。

要するに、元明は粗暴で非理知的な時代であった。それ故、その文明も、唐の如く豪華にも、宋の如く精美にもなり得なかった。元の文宗の奎章閣や、明の成祖の『永樂大典』などの僅かな例を除いて、朝廷はほとんど文化事業に興味を示さなかった。官界で影響力をもった詩人もなかった。呉中の四傑の惨死より、李東陽の登場に至る十五世紀の約百年は、中国文学史上に稀な暗黒時代である。

それではこの時代は、文化的に無視してよいのであろうか。否、決してそうではない。唐宋期に成就された高度の文化遺産は、変質しながらも、徐々に人民の間に浸透し、それが全社会を動かす巨大なエネルギーとして、着実に生長を続けていたのである。文化のあらゆる面で、突出した成果を産まなかったが、この時代は、人民が過去の文化を消化していたのである。詩についても同様のことが言えよう。

南宋からすでに、市民の作詩への参加が顕著に認められるが、元明に入ると、その数は膨大なものとなった。この広大な底面は、しばしば屹立する頂点を欠いており、その成果は浅薄・陳腐と罵倒されても、その中に、自ずから新しい傾向と視座と感興とを提供していることは否定できない。そして作詩活動に伴う熱氣と喧騒も、詩そのものの萎靡を救うのに力があつた、と認めぬわけにはいかないであらう。

さて、このような基盤の上に、それではどのような詩が作られたのであろうか。摸索は元よりすでに始まり、それは次第に唐を、殊に盛唐を祖述することが、次第に明確となった。それはさまざまな論議を経過して、ようやく前七子に至って決定的な潮流となったのであるが、それは各詩人の沈潜した思索の結果からではなく、互いの論争の中より形成されていた。そのためか、詩話などの形式で、自己の詩論を嚴密化し、体系化しようとしたものは少なく、多くは論敵を打倒せんがための饒舌であつたので、成果は非常に乏しい。

次に詩型の点からは、古いスタイルである樂府と古詩の中に、詩の可能性を求めたと見える。これは、詩想の凝結は、絶句・律詩といった近体詩に於いて、唐宋を超すことはできぬという絶望からでもあろう。しかし、六朝風の可憐な小詩、あるいは民謡風の鄙びた竹枝に、すぐれた作手を数えることができる。

樂府・古詩は近体にくらべると、句数や平仄の制約も自由であり、長短句を交えて、殊更に破調の効果をねらうこともでき、抒情よりも叙事に適している。つまり前述の、ある背景をもつ状況を歌うのに、より適しているのである。しかし、この樂府・古体も、前後七子が、詩想を古代へ更に密着させようと、一斉に模擬剽竊に赴いた時に、その生命を失った。明末からはこれに代わって、六朝の艷麗を慕う吳偉業らの歌行体の長詩が、より均齊な美しさをもって登場し、また詞余の復活も試みられる。

「文は秦漢、詩は盛唐」を呼号した復古派が、ようやく衰落すると、性靈を尚ぶ公安の三袁、幽深孤峭を旨とする竟陵の鍾譚等、さまざまな主張が現れたが、要するに、元明の詩は概して無学の詩であつた。豊富な学識を華麗な詩想へ盛りこもうとする錢謙益が、明末に登場するに及んで、三百年の風潮はことごとく一掃され、清初には、宋詩への回帰が企てられた。詩に学は必要ではない、といわれるが、通観すれば、元明の詩は直情で、屈折や曖昧は少ない。そして学殖の乏しさが、これと表裏の関係にあることも、また否定できないであらう。

宋以後の詩、特に元明詩の研究はこれからである。中国に於いてもわが国に於いても、先人の業績は未だ極めて少ない。概説書としては、吉川幸次郎氏のそれが唯一のものである。次に近年出版された参考となるべき諸書を、列挙しておこう。

- (1) 『元明詩概説』 吉川幸次郎 昭38 岩波書店（中国詩人選集二集2）
 - (2) 『近代詩集』 入谷仙介（元） 福本雅一（明） 松村昂（清） 昭46 朝日新聞社（中国文明選9）
 - (3) 『宋元明清詩選』 前野直彬 昭48 平凡社（中国古典文学大系19） なおこの中に収める元明詩人は、趙孟頫・范梈・楊維禎・薩都刺・高啓・李夢陽・李攀龍・袁中郎の八名である。
- 各詩人についての注釈は、次の三種である。

- (4) 『高啓』 入谷仙介 昭37 岩波書店（中国詩人選集二集10）
 - (5) 『高青邱』 蒲池歆一 昭41 集英社（漢詩大系21）
 - (6) 『袁中郎』 入矢義高 昭38 岩波書店（中国詩人選集二集11）
- 中国人の選詩集として主なものは、次の七種である。

- (7) 『元詩選』四集 清顧嗣立
 - (8) 『元詩別裁集』九卷 清張景星
 - (9) 『元詩紀事』四五卷 陳衍
 - (10) 『列朝詩集』八一卷 清錢謙益
 - (11) 『明詩綜』一〇〇卷 清朱彝尊
 - (12) 『明詩別裁集』一二卷 清沈德潛
 - (13) 『明詩紀事』一八七卷 清陳田
- また注を有する詩集は、楊維禎・高啓・李東陽の三種にすぎない。